

オーストリアアルプスのエッツタールにおける トレッキングルート分析

ートレッキング・ツーリズムの性格解明に向けてー

呉羽正昭・吉沢 直・松村健太郎

キーワード：トレッキング，ツーリズム，登山道，エッツタール，オーストリア

I はじめに

I-1 問題設定

山岳地域は、グローバルにみてツーリズムの重要な目的地である。山岳は世界の地表面積の24%を占め、その量的重要性は海浜地域には劣るものの、世界のツーリズム年総量の15-20%に達する(Richins *et al.*, 2016)。山岳地域のツーリズムは、登山やスキーに始まり、マウンテンバイク、ラフティングなど多様な活動がみられることは、海浜地域でのツーリズムとは大きく異なる点として評価できるのかもしれない。

なかでも登山は、山岳地域において伝統の長いツーリズム行動として位置づけられる。登山は単純には山に登る行為であるが、さまざまな種類の活動を内包している。宮川・小澤(2008)をもとに整理すると、登山という活動はピクニック、ハイキング、トレッキング(あるいはバックパッキング、ワンダーフォーゲル)、クライミング、アルピニズムに分けられる。さらにこの順序で、①身体性・負荷性と②精神性・目的性という2つの変化軸でその特性が増加していく。つまり登山は、身体的に負荷がかからずに気軽に行動できるピクニックから、身体的負荷が大きく目的も専門的なアルピニズムへと続く連続体という解釈も可能で

あり、後者は専門的な技術が必要とされる。本稿では、平均的な人びとが、ある程度の身体的・精神的負荷がありながらも、山に登ることで楽しみを得る活動をトレッキングと捉える。一方、未踏峰への登頂、ある程度以上の技術を要する岩稜の本格的登山などはアルピニズムとして区別する。

日本において、トレッキングを含む登山の性格は、時代の変遷とともに大きく変化してきた(小泉, 2001)。江戸時代までは、ツーリズムの側面も有していた信仰登山が卓越していた。例えば富士山では、御師集落を拠点とした登山がみられ(松井・卯田, 2015)、登山道も整備されていた(伊藤, 2009)。明治に入りウェストンらによって西洋式登山が導入されると、レクリエーションやスポーツとしての登山、学術研究のための登山が開始された。その後、とくに第二次世界大戦後は学校や職場、地縁団体等を単位とする山岳部や山岳会が中心となり、レクリエーションやスポーツとしての登山活動や専門的登行技術が普及した。こうした形態は上述したアルピニズムと捉えられる。その後はマスコミを通じた百名山ブーム、中高年登山ブームなどがあり、登山の性格も変化するとともに多様化している。こうした変遷に関しては、菊地(2001)などで説明がなされている。山形(2013)はこれらの文献を整理し、平成トレッ

キング・ブームの性格を示した。そこでは、参加者の年齢層拡大、女性トレkkerの増加とともに、手軽で楽しいアウトドア・アクティビティーとしてのトレッキングの増加が指摘されている。

以上は日本における登山の特徴の変遷について簡単に整理したものであるが、グローバルな視点でみると、山岳の地域的分布に基づいて登山の目的地は偏在している(Lew and Han, 2015)。また、登山形態には地域差があり、例えばヒマラヤでは山頂を目指した本格的登山(アルピニズム)、すなわちピークハンティングが目立つ。日本でもアルピニズムが重視される傾向が強く、ピークハンティングは、信仰登山以来の伝統と理解することもできるのかもしれない。一方、ヨーロッパや北米では、アウトドア・アクティビティーとしてのトレッキングを楽しむ形態が多くみられる。ここでは、トレッキングルートの目的地は必ずしも山頂ではないのである。とくに、ヨーロッパアルプスではバカンス文化の普及ともあいまって、夏季バカンスで山岳リゾートに長期滞在し、そこを拠点としたトレッキングやハイキングが目立つ。例えばオーストリアアルプスでは、夏季のリゾート滞在目的の大半がハイキングや登山であり(池永, 2002; 横山, 1999; 2008)、高級ホテルが多く立地する山岳リゾートに加えて、安価な宿泊施設が卓越する農業集落に滞在しながら日帰りで周囲の山域にトレッキングをする形態も多くみられる。同地域について、冬季の滞在者が中心である大規模なスキーリゾートにおいても、夏季ではリゾートに滞在しながらスキー場のゲレンデや周囲の山域で、トレッキングやマウンテンバイクを楽しんでいる例がみられる(呉羽, 2017; 2018)。

ヨーロッパアルプスにおけるトレッキングの誕生は、スイスなどにおける19世紀後半の登山鉄道の建設(呉羽, 2016)によって、本格的な装備や技術を必要としない登山が普及した事実と関係すると考えられる。本研究は、トレッキングの性格を追究するとともに、日本の山岳地域とヨーロッパアルプスにおけるトレッキングの違いに注目する。

1-2 従来の研究と本研究の目的

登山に関してはこれまで多くの研究がある。登山が有する文化的な側面に注目した研究では、登山史に関するものが多い。先にあげた小泉(2001)や菊地(2001)、山形(2013)はトレッキングにも触れているが、大多数はアルピニズムを対象としている(例えば、布川, 2015; 田口, 1995; 山崎, 1986など)。ただし、近年ではトレッキングを対象として、登山者の活動やその行動生態、さらには遭難やそのリスクに注目した研究が大量に現れている。

まずは、登山者の属性や意識に関する研究がある。例えば、小林・ジョーンズ(2017)は、北アルプスと富士山で登山者の属性、目的、リスク対策について検討した。また、岡本・藤原(2015)は、北アルプスの燕山荘に宿泊した登山者を対象にアンケート調査を実施し、登山者の属性にみられる特徴と登山動機の構造を明らかにした。中島ほか(2010)は、至仏山の登山道の保全に対する登山者の意識を分析した。

山岳遭難に関する研究も多い。例えば、村越(2010)は山岳遭難の実態をその理由などに注目して明らかにした。山本ほか(2011)は富士山において登山ルート別の遭難事故の違いを検討した。

以上で示した諸研究は、登山という活動を対象としたものであると認識される。それに対して、登山がなされる場所、例えば山小屋や登山口に注目した研究もある。梅干野(2013)は北アルプスの山小屋に注目し、その建築や整備に注目して登山の性格を明らかにしようとしている。また、登山の拠点、すなわち登山口の機能に注目した研究として、猪股ほか(2017a)は上高地のゲートウェイ的な性格を解明した。

登山の重要なインフラである標識や登山道・トレッキングルートを分析した研究もみられる。鈴鹿山系で登山道に存在する「標識」の意匠と配置を調査・分析した宮島・橋本(2018)は、標識意匠の不統一の現状を指摘した。また、登山道については多くの研究がある。登山道の整備状況

(菊地, 2001), その荒廃, 保全や管理(渡辺編, 2008), ツーリズムや遭難事故との関係(信州大学山岳科学総合研究所編, 2009)などに注目した研究, 登山者の増加による登山道侵食を分析した研究(渡辺, 2008)などがその中心である。また登山道整備に関する地域住民や登山者の意識に注目した研究もある(愛甲・乗富, 2005; 愛甲ほか, 2006)。しかし, 登山道・トレッキングルートについて, 登山者がどのように利用しているのか, どのような物理的特徴を有するのかを追究した研究はみられない。

一方, 松本ほか(2006)は, 警察署に提出された登山届のデータを分析し, 北アルプスにおいてどの登山道・トレッキングルートを利用したかについて解明した。いわば登山者の流動を解明した貴重な研究として評価される。また, ルート(信越トレイル)の新規整備を通じた農山村におけるトレッキング・ツーリズムの確立に関する分析(猪股ほか, 2017b)もある。

一般に, どのような登山道・トレッキングルートが存在するのかについては追究することは, トレッキング・ツーリズムの特性を把握するうえで重要な視点であろう。というのも, 距離や勾配, 目的地の性格などは人びとのトレッキング行動を引きおこす重要な要素である。しかし, 管見の限り, この点に注目して分析した研究はみられない。

そこで, 本研究は, オーストリアアルプスに位置するエッツタールにおけるトレッキングルート进行分析することを通じて, トレッキング・ツーリズムの特性を明らかにする。また, 日本アルプスのトレッキング・ツーリズムとの違いを指摘し, 違いをもたらす要因を考察する。本研究の分析対象は, エッツタール観光協会Ötztal Tourismusのホームページ上に掲載されている225本のルートである¹⁾。一般に登山ルートの情報提供については, 書籍として刊行された山岳ガイドブックがその役割を果たしてきた。エッツタールでは, Marberger (2013), Moczynski und Schmarda (2016), Zahel (2016, 2017) などがある。しかし, それらに掲載されるルートは, 最多数のMarber-

ger (2013)においても70にすぎず, 限られた数のルートが厳選されている。そこで本研究では, インターネット上に掲載されたルートを用いた。もちろん, 近年多くのトレッカーが, 地図情報と測地情報システム等とが連動した, インターネット上のルート案内を利用しているという実情も本データ選定理由の一つである。

225本のルートについて, それぞれ地区, 距離, 所要時間, 困難度(平易, 中級, 上級の3段階), 最高点標高, 最低点標高, 標高差, 出発地, 出発地標高, 目的地, 目的地標高, 索道利用の有無のデータを整理した。それぞれの指標に関する内容や情報は第1表の通りである。

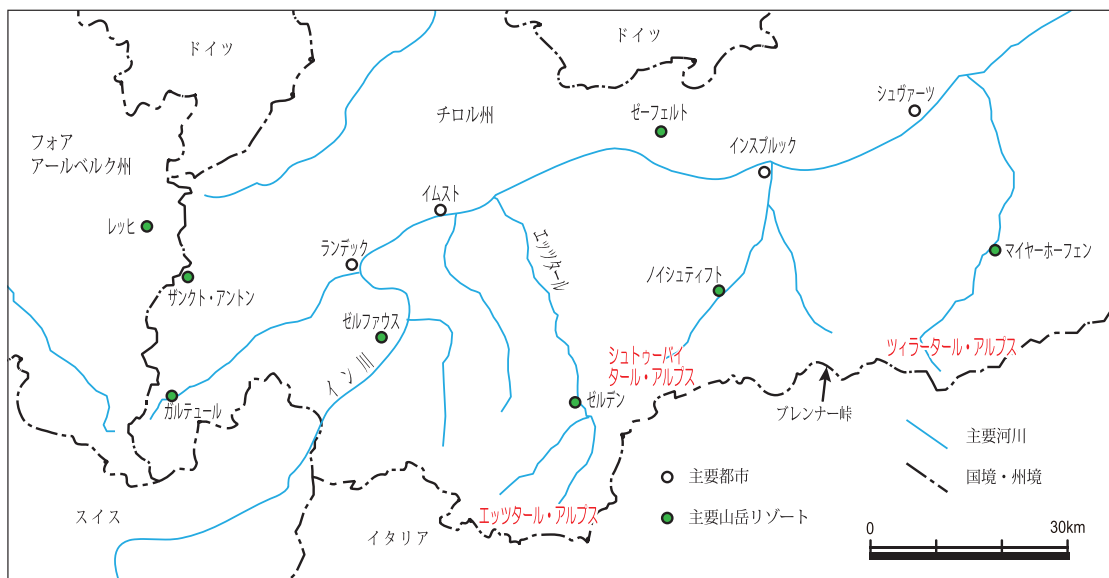
II 研究対象地域

II-1 エッツタールの概要

エッツタールはオーストリアの西部, チロル州南西部に位置する河谷である(第1図)。イン川の支流であるエッツタール川によって形成され, 南北方向にその延長距離は約60kmに達する。オーストリア・アルプス, さらにそれはそれを包含する東アルプス最大級の河谷である。谷底の周囲には標高2,000-3,000m級, 氷河作用によって形成された地形を有する山岳が連なっている。山岳地域は, 東アルプスで最も標高の高い山脈である, 中

第1表 分析データの概要

指標	データの内容・情報
地区	トレッキングルートが存在するゲマインデ(基礎自治体)に分けた(ただし, 最奥部のゼルデンについてはさらに4地区に分けた)。エッツタールの南部から北部に向かって, ジルツ 654m, ハイミング 670m, ザウテンス 812m, エッツ 812m, ウムハウゼン 1,031m, レンゲンフェルト 1,179m, ゼルデン1,368m(ゼルデン, ツヴィーゼルシュタイン, フェント, オーバーグルグル)となる(標高は各自治体の中心部のもの)。
距離	トレッキングルートの距離
所要時間	トレッキングルートの所要時間
困難度	平易, 中級, 上級の3段階(一部不明)
最高点標高	トレッキングルート上の最高点標高
最低点標高	トレッキングルート上の最低点標高
標高差	トレッキングルート上の最高点標高と最低点標高の差
出発地	トレッキングルートの出発地点
出発地標高	トレッキングルートの出発地点標高
目的地	トレッキングルートの目的地
目的地標高	トレッキングルートの目的地標高
索道利用の有無	トレッキングルート内における索道利用の有無



第1図 エッツタルの位置

央アルプスに含まれる（呉羽，2017:113）。地質構造や地形に基づく山群区分によれば，谷の東側はシュトゥーバイタル・アルプスStubaitaler Alpenに該当し，西側および最南部はエッツタル・アルプスである。これらは，プレナー峠のさらに東に続く，ツィラータル・アルプスZillertaler Alpenとホーエ・タウエルンHohe Tauernと合わせて，3500m級のピークをもつ東アルプスで最も標高が高い山岳地域となっている（Jülg, 2001）。こうした山群区分は，オーストリアやドイツの山岳会によって，登山山域の区分（例えばDeutscher Alpenverein *et al.*, 2016）に用いられている。なかでも標高3,768mのヴィルトシュピッツェWildspitzeのように，氷河を有する標高の高い山岳地域であるエッツタル・アルプスは，オーストリアを代表する山岳ツーリズムの目的地でもある。

谷底部分には，集落および採草地を中心とする耕地が存在する。北から，ハイミング，ザウテンス，エッツ，ウムハウゼン，レンゲンフェルト，ゼルフデンのゲマインデ（基礎自治体）が存在する。エッツタルでは，19世紀後半頃からツーリズムが徐々に重要になった。その功績者の1人は，1860

年にフェント（写真1）に司祭として赴任してきたフランツ・ゼンFranz Sennである（Pinzer und Pinzer, 2008）。彼は，登山道や山小屋を整備することで登山を発展させ，また後述するドイツ山岳会の設立に携わった。1880年代にはブレスラウ小屋やラモール小屋などが整備され（Deutscher Alpenverein *et al.*, 2016），やや遅れてフェントやオーバーグルグルにも宿泊施設が立地しはじめる（Nehm und Köll-Scheiber, 2012）。20世紀に入るとスキーが導入され，第二次世界大戦後はマス・



写真1 フェントとシミラウン氷河

大規模なスキー場のないフェントでは，夏季のトレッキングが盛んである。

（2018年9月呉羽撮影）

ツーリズムの影響で急激に観光化が進んでいった(呉羽, 2017)。エッツタールでは、南に向かうほど、すなわち標高が高くなるほど山岳ツーリズムの重要性が高い。最奥部のゼルデンには、ツーリズムにかなり依存した地区が複数ある(ゼルデン, ツヴィーゼルシュタイン, フェント, オーバーグルグル)。

現在のエッツタールで、山岳ツーリズムのなかでも、経済的に最も重要であるのはスキーツーリズムである。とくに、ゼルデンとオーバーグルグル、さらにはエッツには大規模なスキー場があり、山麓地区にはスキーリゾートが形成されている(呉羽, 2017)。加えて、それらの大規模スキー場への近接性を活かして、レンゲンフェルトやウムハウゼンにも多くの宿泊施設が立地するようになっている。ただし、序論でも述べたように、夏季のツーリズムがその重要性を増しており、スキーリゾートとしての性格を強めている。とくに、ゼルデンやオーバーグルグル、フェント、エッツは、周囲の山岳地域へと至るさまざまな索道・山岳道路を有し、トレッキング・ツーリズムの拠点となっている。ただし、レンゲンフェルトやウムハウゼンにおいても、エッツタール川の支流の谷に夏季のトレッキングの基地になる地区が複数ある。

Ⅱ-2 オーストリアアルプスにおけるトレッキングの変遷

オーストリアでは、1870年代以降、山岳会によって山小屋・地形図に加えて、膨大な数のトレッキングルートが整備されてきた。1862年、オーストリア山岳会ÖAV: Österreichischer Alpenvereinは、イギリス山岳会The Alpine Clubに次いで世界で二番目の山岳会として設立された(Gidl, 2007)。その後、1869年に設立されたドイツ山岳会Deutscher Alpenvereinと1873年に合併し、ドイツ・オーストリア山岳会Deutscher und Österreichischer Alpenvereinとなり、オーストリア併合の1938年まで続いた。その後は1945年までドイツ山岳会となったものの、第二次世界大戦後は、再びオース

トリア山岳会となった(略称は2014年までOEAVで、その後ÖAV)。

ドイツ・オーストリア山岳会の設立は、オーストリアに留まらずドイツ帝国という山岳地域以外に広大な国土をもつ後背地が獲得されたことも意味する。ドイツでは、その後支部数や会員数が拡大したのみならず、オーストリアアルプスでの山小屋建設が急速に拡大し、その結果トレッキングの環境は急速に発展した。1874年の山岳会会員数は4,074人、支部数は46であったが、1914年にはそれぞれ102,092人と407支部へと増加した(Gidl, 2007)。支部の範囲は、南はトリエステ、西はストラスブール、北はキール、東はケーニヒスベルクと広大なドイツ語圏におよんでいた。支部の重要な功績のひとつは山小屋整備の整備である。1914年までに東アルプスに345の山小屋が建設された(Gidl, 2007)。それゆえに、オーストリアアルプス西部の標高の高い山岳地域では、今日でも多くの山小屋の名称はドイツ等の都市、すなわち支部が存在し支部名称となった都市名が付されている。たとえば、オーストリアアルプスで最も古い山小屋に分類されるベルリン小屋(ツィラータール・アルプス)は、1879年にベルリン支部によって整備された(Deutscher Alpenverein *et al.*, 2016)。またエッツタールでは、ブレスラウ小屋(写真2)が当時のドイツ・オーストリア山岳会ブレスラウ支部²⁾によって建設された(Deutscher



写真2 ブレスラウ小屋

ここを目的地とするトレkkerや、さらに高い山域を目指して宿泊する上級者もみられる。

(2018年9月呉羽撮影)

Alpenverein *et al.*, 2016). さらなる功績として、オーストリアアルプス全体で数万の案内版(写真3, 4)が設置されるなど(Gidl, 2007), 登山道の整備がなされた。当時の山岳会の役割は、学術部門にも及んでおり、さらにはガイド技術、救急救助技術、環境保全、文化活動などの展開と多岐にわたっていた。

登山鉄道やロープウェイの整備もトレッキングの発展に大きく寄与した。ヨーロッパアルプスにおける登山鉄道は、1870年代にまずスイスで整備が進み、その後1890年前後からオーストリアでも設置された(呉羽, 2016)。さらに1920年代になると、ロープウェイ(空中ケーブル)の建設も進んだ。こうした整備は、誰もが山岳地域の展望地点に簡単に到達できるようになったことを意味するとともに、こうした登高施設の終点、すなわち



写真3 旧式のルート案内版(プレスラウ小屋付近)
(2018年9月呉羽撮影)



写真4 新式のルート案内版(プレスラウ小屋付近)
(2018年9月呉羽撮影)

標高の高い地点からのハイキングやトレッキングが可能となり、またトレッキングに要する時間の短縮がもたらされた。

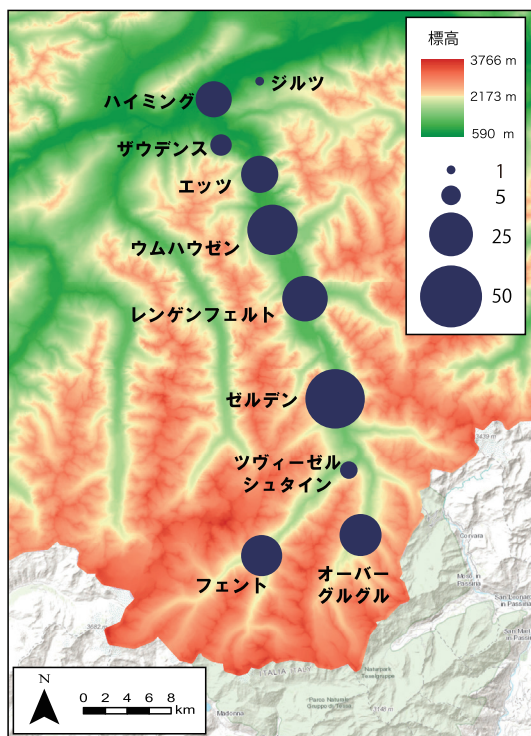
第二次世界大戦後、1950年代からヨーロッパアルプス全体で夏季のマス・ツーリズムが発展した(Bätzing, 2015)。その活動の中心はハイキングやトレッキングであった。山麓の農村では農家民宿が開設され、訪問者の受け皿となった。さらに、一部の農村では1960年代以降にスキー場開発が進み、冬季にはスキーマーが長期滞在するようになった。現在、夏季の訪問者は、池永(2002)や横山(1999; 2008)が指摘するように、オーストリアアルプスの山岳地域の山麓に位置する農村に1~2週間滞在し、ハイキングやトレッキングを楽しんでいる。長期滞在の拠点は、こうした安価な宿泊施設が卓越する農業集落から、高級ホテルが多く立地する山岳リゾートまで多様である。国土最西端のフォアアールベルク州から、その東のチロル州やザルツブルク州にかけての地域などでは、大小さまざまな拠点が存在し、日帰りで周囲の山域にトレッキングをする滞在者が非常に多い。

Ⅲ エッツタールにおけるトレッキングルートの特性

以下では、225本のルートを取りあげて、地区、距離、所要時間、困難度(平易、中級、上級の3段階)、最高点標高、標高差、目的地、索道利用の有無等について、それぞれの特徴を明らかにしていく。

Ⅲ-1 ルートの地区別分布

第2図はルートの地区分布を示しているが、エッツタール周囲の稜線を縦走する高山ルート(後述)は表現されていない。ルートが存在する地区は、ほぼ均等とみることでもできるが、エッツタールの奥に行くほど、すなわち山岳の標高が高くなるほどルート数は増えている。とくに、ゲマインデゼルデンで最も多く、95ルート存在する。



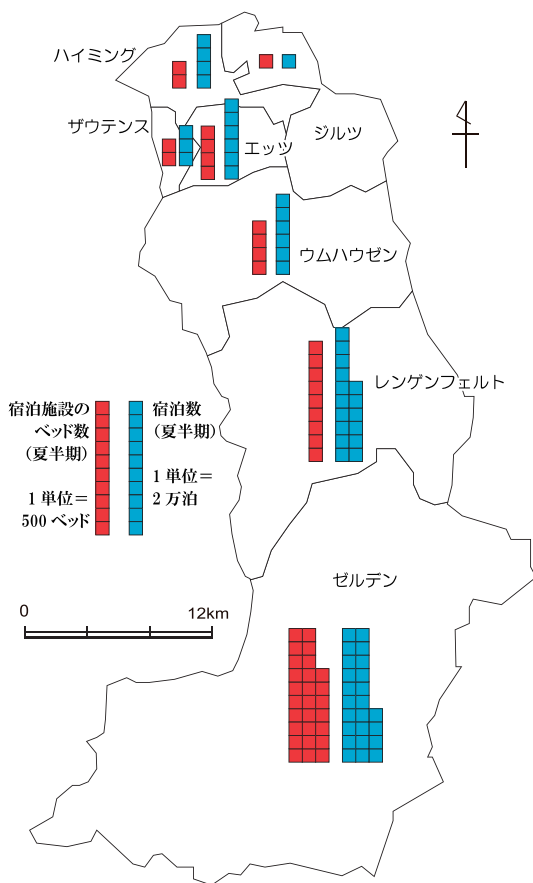
第2図 エッツタールにおける分析対象トレッキングルート の地区別分布 (2018年)

注：エッツタール周囲の稜線を縦走する高山ルートは含まない。

(エッツタール観光局資料により作成)

南部ではハイミング (17ルート) とエッツ (18) で多く、その南東部もしくは東部に位置する山地へのルートが多い。後述するようにエッツでは、ゴンドラリフトが存在し、約2,000mの展望地点へと至ることが可能であり、そこから歩き始めるルートも多くみられる。ウムハウゼン (33) では、中心部の東を遡った谷にあるニーダータイ Niederthai を拠点とするルートが比較的多い。レンゲンフェルト (27) では、同じく中心部を東に遡ったグリース Gries と中心部南のフォーベン Huben からのルートがある。ゲマインデゼルデンでは、ゼルデン地区で谷の東西ともに多くのルートがある (46)。オーバーグルグル (23) とフェント (22) はともに谷の最奥部に位置するため、氷河に至るルートをはじめとしてさまざまなルートが存在する。

山岳の標高が高くなるほどルート数が増える特徴は、宿泊施設のベッド数や宿泊数にみられる地域的傾向と類似する (第3図)。夏半期のベッド数はゼルデンで1.3万を超えており最大であり、そこからレンゲンフェルト (約4,600)、ウムハウゼン (約2,200)、エッツ (約2,100) に向かって減少する。宿泊数でも同様の傾向が確認され、ゼルデンにおける48万泊から、レンゲンフェルトの約31万、ウムハウゼンとエッツがそれぞれ約13万と続く。ただし、冬半期になると、宿泊数に対する標高の影響は非常に強く現れ、ゼルデンの宿泊数はレンゲンフェルトの4倍以上となり200万泊を超える (2017年)。



第3図 エッツタールにおけるゲマインデ別ベッド数および宿泊数 (2017年)

注：夏半期は、2017年5月から10月をさす。

(Statistik Austria (オーストリア統計局) 資料により作成)

Ⅲ－２ ルートの距離・所要時間・標高

225本のルートの距離を平均すると7.6kmとなり、所要時間は約3時間（190分）であった。また最高点標高の平均は2,155m、標高差の平均は644mに達する。全体の50ルート程度が出発地と到着地が同じで、途中の滝や湖を観察して戻るコースとなっている。しかし、ほとんどのルートは片道であり、登りのみが提示されている。つまり、帰りのルートや時間は考慮されていないことになる。また、下りのみのコースはわずかである。

ルートの特性をみるために頻度分布を検討すると（第4図）、距離は3-6kmで、所要時間が1-4時間程度のルートが卓越する。また、最高点標高は1,500-2,500mの段階で最も多く、そこから標高が高くなるとルート数は減少する。標高差についてもさまざまなルートが存在するが、900m以下で4分の3を占める。

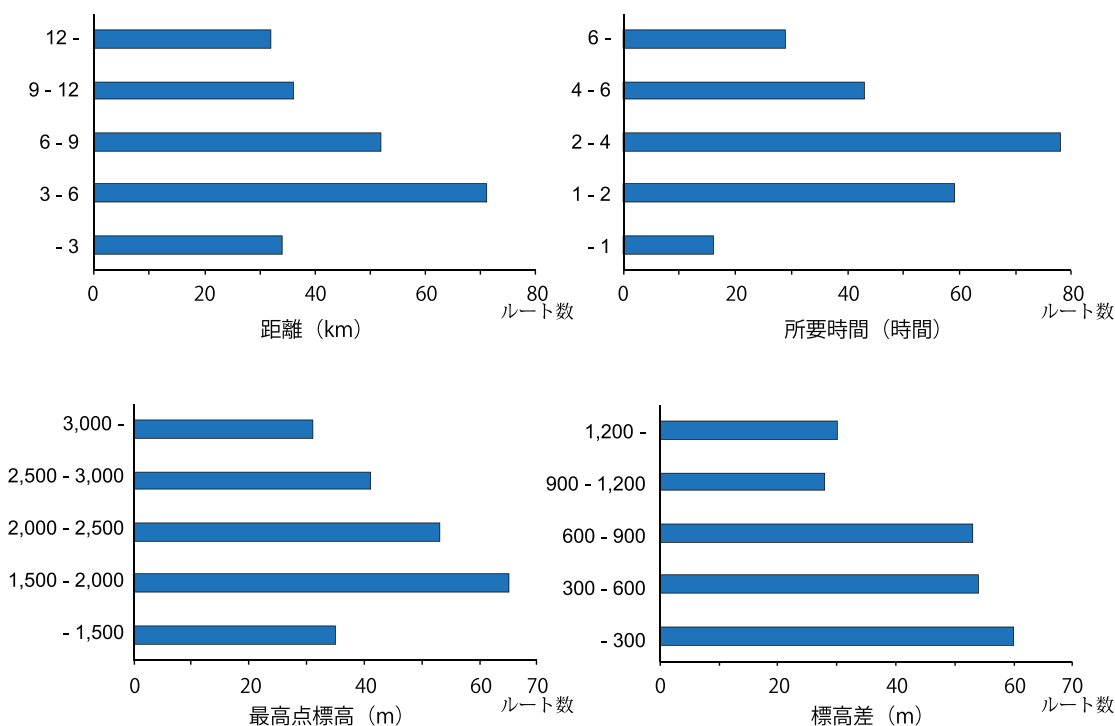
つまり、全体として一般的で難易度のそれほど高くないルートが多い。困難度別にルート数をみ

ると、初級者向けが112、中級者向けは72であるのに対して、上級者向けはわずか29にすぎない。基本的にはリゾートタウンを拠点にした短距離の日帰りルートで、その日のうちに出発地点に戻って来ることが可能となっている（写真5）。ゴンドラリフトの利用は15ルートであるが、とくにエッツとゼルデンで多くみられる。逆に、長距離のルートのほとんどは、後述するような縦走ルートの一部を構成しており、ほぼ上級者だけに限定されたものである。

Ⅲ－３ ルートの目的地

ルートの目的地の標高は平均で1,927mであり、先述した最高点標高の平均2,155mよりも若干低い。これは出発地よりも目的地の標高が低いルートが複数あるためである。目的地の性格に注目すると、最も多いのは飲食サービスの整ったアルムやガストホーフ、山小屋である（第5図）。

アルムとは、高地放牧地のことで、森林限界を



第4図 エッツタールにおけるトレッキングルートの諸特徴（2018年）

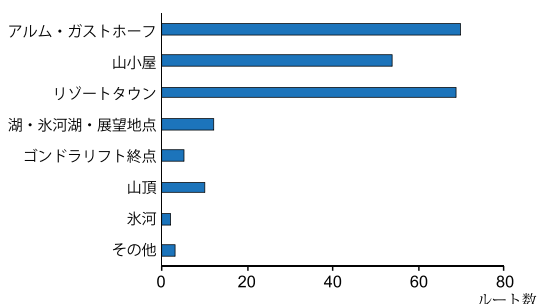
（エッツタール観光局資料により作成）



写真5 軽装の日帰りトレkker (オーバーググル)
ゴンドラリフトもあるために、約2600mの標高にもかかわらず軽装の日帰り者が多い。
(2018年9月呉羽撮影)



写真6 アルム小屋「クレーブレ」(ゼルデン東山麓)
テラス席で新鮮な乳製品や肉の燻製、飲料を提供する。
(2018年9月呉羽撮影)



第5図 エッツタールにおけるトレッキングルート上の目的地 (2018年)
(エッツタール観光局資料により作成)



写真7 山小屋「シェーンヴィースヒュッテ」
(オーバーググル)

オーバーググルから徒歩1時間で到達でき、ロートモース谷の氷河景観を観察できる。
(2016年9月呉羽撮影)

越えた地域、または森林を開拓して放牧地を設置した場所もあり、スイスやオーストリア最西部ではアルプと呼ばれる。アルムは植生が草地であるために展望点としての性格をもち、景観に優れる。そればかりではなく、管理小屋（またはアルム小屋）のほとんど全てがレストラン機能を有する。とくに、チーズをはじめとする乳製品やベーコンやハムなどの燻製を強調している（写真6）。こうした機能を拡大させた施設はガストホーフ（宿泊機能付きレストラン）で、伝統的な農村料理をアピールしている場合が多い。

さらに山小屋（写真7）の多くは、日本の例のように稜線の山頂付近に立地するわけではなく、展望地点に立地する例が多い。多くの場合、林道

や業務用索道で食材等を輸送することができるために、充実したレストラン機能をもち、生ビールや比較的豪華な食事を摂ることも可能となっている。こうしたアルムやガストホーフ、山小屋が目的地となり、その日の朝にリゾートタウンを出発し、お昼前後にこうした施設に到着し食事を摂りながら休息して、リゾートタウンに戻るようなトレッキングパターンが一般的である。リゾートタウンを目的地とするものは、ほとんどが先述した、途中の滝（写真8）や湖を観察して出発地に戻る例であり、一部は別のリゾートタウンを目指す



写真8 ロートモースの滝（オーバーグルグル）
氷河谷の段差によって生じた滝で、周囲のモミの森林
と合わせた観察コースになっている。
(2016年9月羽根撮影)

すコースとなっている。

日本のトレッキングルートとの大きな違いは、山頂に到達するルートがかなり少ないことである。そのルート数はわずか10であり、山頂を目指したトレッキングの重要性はエッツタールでは非常に低い。こうした傾向はオーストリア・アルプス全体に共通してみられる。著名な山の山頂を目指す登山者もいるが、それはアルピニズムの範疇である。ある程度の技術を習得した登山者が、ガイドを伴ってもしくは熟練パーティーで山頂を目指すことになり、一般のトレッカーがむやみに山頂を目指すことはないと思われる。

冬季はスキーに使用されるゴンドラリフトの利用もみられる。上りでリフトを利用する場合もあれば、逆に下りで利用する場合もある。一般に膝の関節に負担がかかるのは下りであるためである。ルートがスキー場内のコースに設けられる場合もある。

Ⅲ-4 縦走ルートの整備

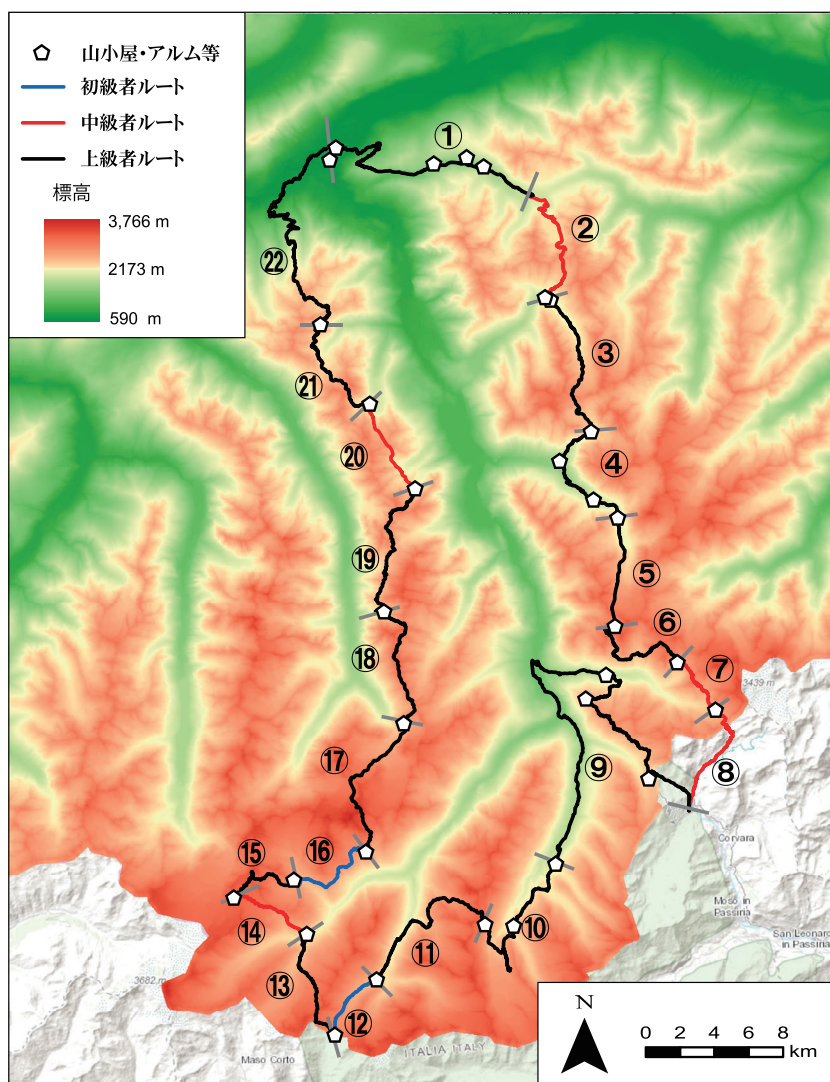
前節までで、トレッキングルートの多くは基本的にはリゾートタウンを拠点にした短距離の日帰りルートであることを指摘した。しかしながら、2010年頃以降、エッツタールにおける夏季ツーリズム推進のなかでトレッキング・ツーリズムの重

要性が再認識され、その一環で長大な縦走ルートについても強調されてきた。それが、河谷周囲の稜線を縦走する「エッツタールトレック Ötztal Trek」で、22区間全長242kmにわたる（第6図、第7図）。そのコースのほとんどは稜線を行く既存のルートであり、それらを「ひと筆書き」で繋ぎ、縦走ルートを形成した。ただし、一部のルートは新しく整備されている。

1区間を除いて全て山小屋に宿泊する形態となっており、半数以上のルートが上級者向けである（第6図）。氷河を横断するルートなどではガイドの同行が推奨されている。全コースを縦走するトレッカーもいるが、その一部のみを縦走すること、逆のルートで登行することも可能である（写真9）。高低差のプロファイルを見るとアップダウンが顕著であり、体力を要するルートが多い。その一方で、かつてこれらのルートはアルピニズムの領域であり一部の技術習得者のみに限定され利用されたが、近年の夏季ツーリズムの推進のなかで長距離トレッキングとして宣伝し、新たにブランディングされているとも評価できる。こうした動きは、オーストリアアルプスでは、ツィラータール・アルプスで最初にみられた。先述のベルリン小屋とその周囲の山小屋を結ぶルートが1976年に完成し³⁾、「ベルリン・高地縦走ルート Berliner Höhenweg」（9区間80km）と呼ばれるようになった。その後は、ほかの山域への展開はみられなかったが、エッツタールの例と同様に、2010年前後からシュトゥーバイタールやピッツタールにおいても縦走ルートの強調がなされた。

「エッツタールトレック」に加えて「エッツタール古道 Ötztaler Urweg」も整備された。こちらは、エッツタールの谷底沿いの古道を中心に構成されたもので、12区間185kmからなるルートである。何れもリゾートタウンを拠点とする既存のコースからなり、最高点は標高3,187mのラモールヨッホ Ramoljoch（オーバーグルグルとフェント間の鞍部；後述の第8図参照）である。

このように、さまざまなトレッキングルートがあることを活かし、それらを結びつけ、さらに稜



第6図 エッツタルトレックのルート図（2018年）

注：ルート番号は第7図に対応する。

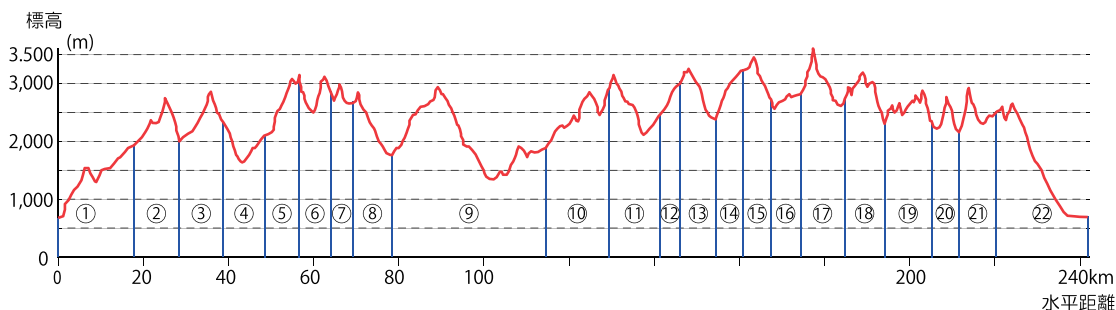
（エッツタル観光局資料により作成）

線縦走や古道といったストーリー展開を付加したツーリズム戦略がみられる。その結果、ルートの多様化もみられ、さまざまな志向を有する登山者のニーズに応えている。

Ⅲ-5 オーバーグルグルにおけるトレッキングルートの事例

オーバーグルグルは、エッツタルにおいて

教会を有する最も標高の高い農業集落である（1,907m；写真10）。夏季には一部の高級ホテルが営業をしないなど、冬季のスキーリゾートとしての性格が強い。しかし、夏季にもある程度の訪問者が長期滞在して、トレッキングを楽しむ拠点でもある。19世紀後半以降、都市から登山者が訪問するようになり、トレッキングルートの整備も進んだ。1883年には、ラモール小屋（標高3,006m；



第7図 エッツタールトレックのルート高低プロファイル（2018年）

注：ルート番号は第6図に対応する。

（エッツタール観光局資料により作成）



写真9 ティーフエンバッハ氷河からエッツタールトレックを継続するトレッカー

重装備のトレッカーのグループがトレックコースを逆回りで辿っていた。

（2018年9月呉羽撮影）



写真10 オーバーグルグル

大規模なホテルが建ち並ぶ高級リゾートで、冬季のみ営業するホテルも複数ある。

（2014年7月呉羽撮影）

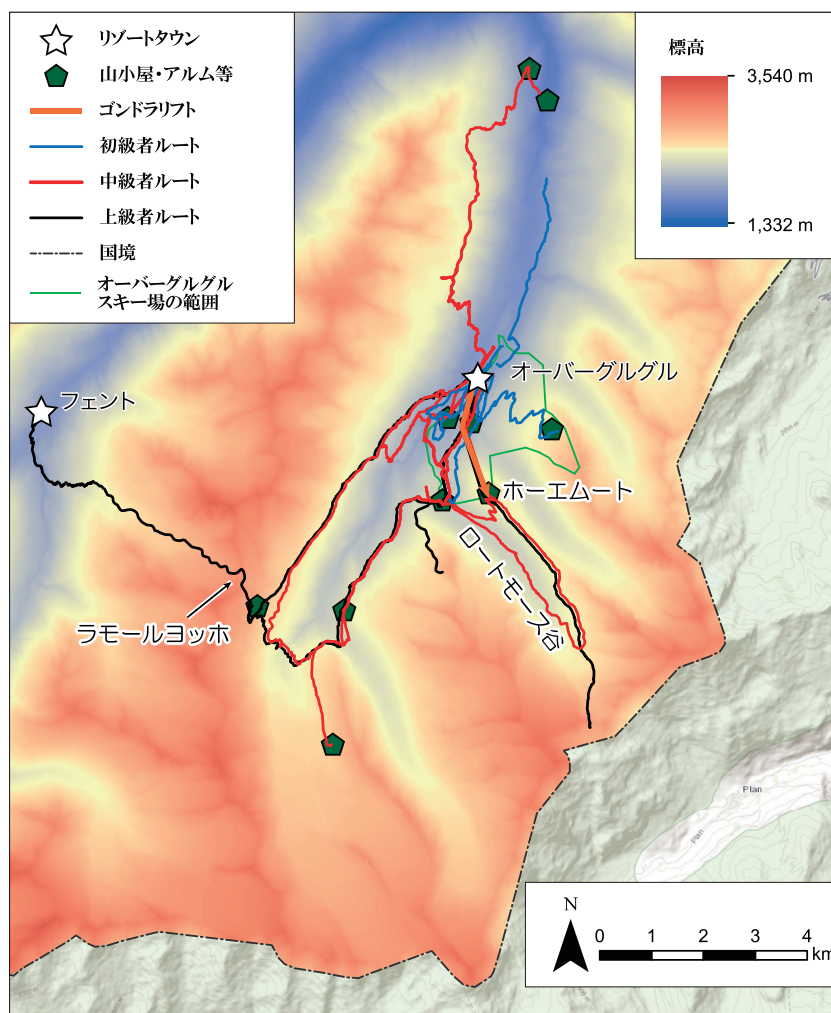
写真11) がラモールヨッホの下部に地元資本によって建設・完成し、1921年にはドイツ・オーストリア山岳会のハンブルク支部に所有が移行した (Deutscher Alpenverein *et al.*, 2016)。

オーバーグルグルのトレッキングルートは（第8図、第9図）、主に谷に沿って分布する。オーバーグルグルを含むグルグル谷（写真12）は、南西から北東に向かって高度を下げるが、この谷の両側に多くのルートが存在している。そこではU字谷の谷底やそれに沿って比較的緩傾斜の初級者・中級者ルートが多くみられる。とくに初級者ルートは距離が短く、リゾートタウン内やスキー場エリア内にルートが多い。一方、中級者ルートになると、支谷への展開がみられる。支谷の多くは、グルグル谷に対してほぼ90度の角度で合流し、南東から北西に向かって高度を下げる。支谷



写真11 ラモール小屋

エッツタール・アルプスで最も古い山小屋の1つである。
（2018年9月松村撮影）



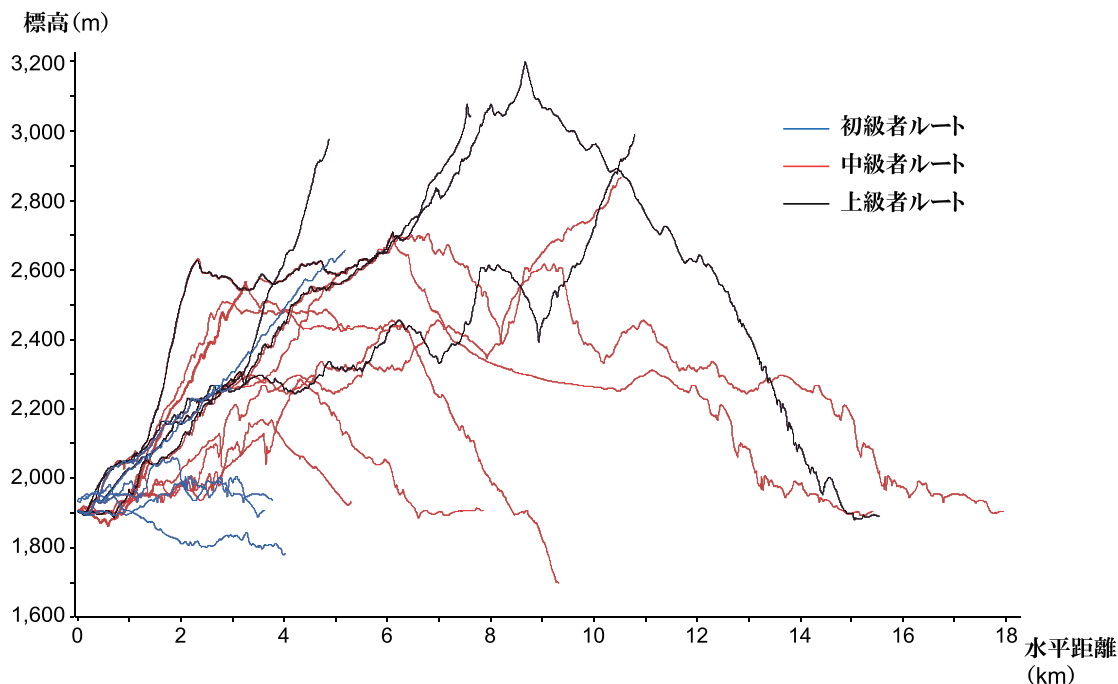
第8図 オーバーグルグルにおけるトレッキングルート（2018年）

（エッツタル観光局資料により作成）

の尾根上や谷底にルートが存在し、やや傾斜の急なルートもみられる。とくに、ロートモース谷(写真13)は上部に氷河を有し、そこへのアクセスとしてホーエムートまでゴンドラリフトを利用するために人気が高い(第8図)。一般に、中級者ルートは水平距離が比較的長く、ほとんどは山小屋・アルムを経由したものとなっている(第9図)。それ以外の標高3,000mを越える山域へのルートは上級者向けである。とくに、傾斜もきつく距離が長いルートで、目的地はピーク・氷河・鞍部となり、ある程度の体力と技術が必要となっている。

例として、ラモールヨッホを越えてフェントに至るルート、ロートモース谷氷河末端部に至るルートがある。

オーバーグルグルでは、全体として中級者向けのルートが多い。ただし、リゾートタウン付近には初級者ルートが存在する一方で、標高3,000m級の山域へと至るような上級者向けルートもみられ、多様なトレッカーのニーズに対応することが可能となっている。



第9図 オーバーグルグルにおけるトレッキングルートの高低プロファイル（2018年）

（エッツタール観光局資料により作成）



写真12 グルグル谷

グルグル谷を上流にはグルグル氷河があり、谷の両側は比較的傾斜がきつい。

（2011年8月呉羽撮影）



写真13 ロートモース谷

グルグル谷の支谷で、尾根をしばらく進みさらに右側にトラバースすると、氷河末端付近に至ることができる。

（2016年9月呉羽撮影）

Ⅲ－6 エッツタールにおけるトレッキングに関するインフラ整備

分析の結果、エッツタールでトレッキングルートの中で多くを占めるのは短距離の日帰りルートであり、その目的地は飲食サービスの整った山小屋やアルムであった。逆に山頂に到達するルート

は比較的少なくなっている。つまり、老若男女問わず多くの観光客が氷河地形を含む山岳景観を楽しみながら、トレッキングを行うことができる。一方で、近年、河谷周囲の稜線を縦走する上級者

向けの「エッツタールトレック」、中級者でも対応できる「エッツタール古道」といった長距離ルートが整備されており、トレッキングルートの多様化もみられる。

こうした、多様なトレッキング・ルートでは人びとが利用しやすい環境が整備されている。それは、とくに標高3,000m級の山岳空間にまで索道や山岳道路の開発が進んでいる点にみられる。エッツタールでは、夏季に標高2,000m以上の地点に至るゴンドラリフト（写真14）（またはチェアリフト）が複数運行されている（第2表；第10図）。それによって、トレッキングの時間の短縮や簡易なトレッキングを可能としている。



写真14 ゴンドラリフト「ガイスラッハコーゲル」の山頂駅

標高3,040mの駅舎にはレストランもあり、ここから下りのトレッキングも可能である。

（2018年9月呉羽撮影）

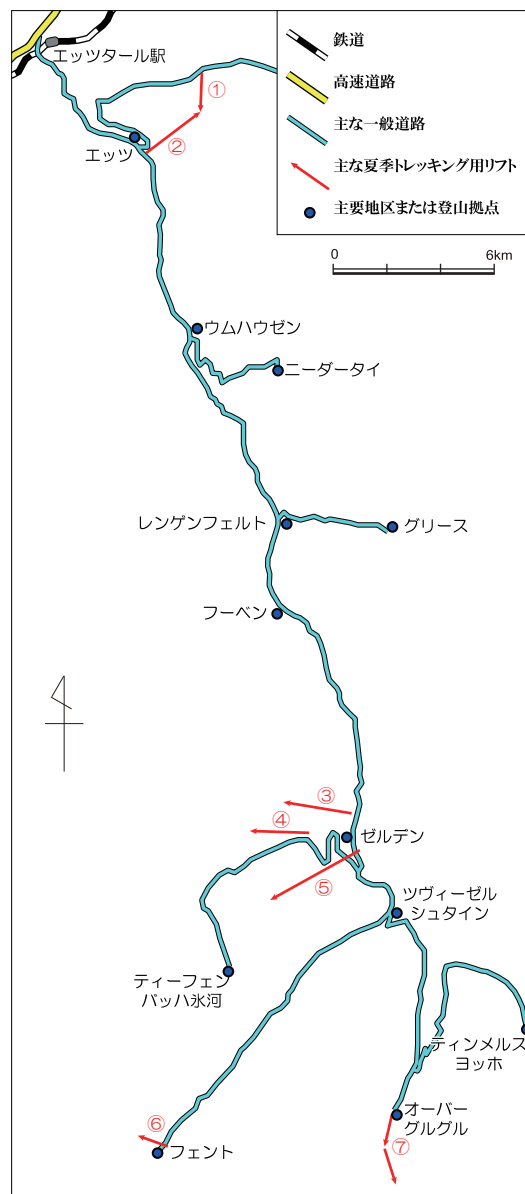
第2表 エッツタールにおける夏季トレッキング向けゴンドラリフト（2018年）

番号	名称	山麓駅標高 (m)	山頂駅標高 (m)
1	オクセンガルテン Ochsengarten	1,538	2,020
2	アッヒャーコーゲル Acherkogel	820	2,020
3	ギッギヨッホ Giggijoch	1,362	2,283
4	ラングエッグ Langeegg	1,912	2,663
5	ガイスラッハコーゲル（2区間） Gaislachkogel	1,363	3,040
6	フェント（チェアリフト） Vent	1,900	2,365
7	ホーエムート（2区間） Hohe Mut	1,930	2,670

注：番号は第10図に対応する。

（エッツタール観光局資料により作成）

また路線バスが主要道路で運行されており、トレッカーも頻繁に利用している。そのみならず、ニーダータイやグリースへの路線、ティーフェンバッハ氷河（最下部標高2,800m）への路線もある。後者はもともと氷河スキー場へのアクセス道路と



第10図 エッツタールにおける夏季トレッキング向け交通インフラ（2018年）

注：番号は第2表に対応する。

（エッツタール観光局資料により作成）

して整備されたものであるが、夏季にはトレッキング向けに、さらには氷河見物者のために利用される。例えば、ゼルデンの宿泊者がティーフェンバッハ氷河のバス停に移動し、そこからフェントにトレッキングして、帰りはそこからゼルデンにバスで戻ることが可能になっている。

こうした交通インフラ整備と並行して導入された仕組みとして、エッツタールカードがある。これは、エッツタールにおいて滞在者向けに、ゴンドラリフトや路線バス、博物館入場券等が無料・割引になるサービスである。提携の宿泊施設では無料で、それ以外の利用者には例えば1週間分が78ユーロ(2018年)で提供されている。エッツタールカードがあれば、先述のゴンドラリフトやバスは無料で利用することができ、トレッカーにとっては大変便利な仕組みである。こうした取り組みはチロル州でも多くのリゾートで導入されており(呉羽, 2018)、今後のさらなる夏季ツーリズム推進の重要な手段として評価される。

IV まとめと課題

エッツタールでは、標高3000m級の山岳空間にまで索道・山岳道路の開発が進んでおり、多くの訪問者が氷河地形を含む山岳景観を楽しみながら、トレッキングを楽しんでいる。トレッキングルートの多くは短距離の日帰りルートで、その目的地は飲食サービスの整った山小屋やアルムであることが本研究で指摘された。一方、河谷周囲の稜線を縦走する「エッツタールトレック」のような長距離ルートも近年整備されており、ルートは多様化している。

こうしたトレッキングルートの性格は、日本のそれとは大きく異なっている。日本の、例えば北アルプスでは、縦走が中心であり山小屋(または近隣テントサイト)での宿泊が一般的である。一方、エッツタールでは日帰りのトレッキングが中

心であり、翌日は別のコースへと出かけていくようなパターンが多い。これには、もちろん、山岳地域での滞在形態の違いが関係している。エッツタールでは個別のリゾートタウンに長期滞在し、その間にさまざまなコースでトレッキングを楽しんでいる。一方で日本ではそうした形態はほとんどみられずに、大都市を出発して山域に入り、山小屋での宿泊、もしくは日帰りという短期滞在の後に自宅に戻るというパターンが多いと思われる。ただし、エッツタールでも近年は長距離トレッキング形態の人気の高まっている。こうした相違点について、今後より深い分析を重ねて考察していく必要がある。

本研究では、観光局が提供しているトレッキングルートを分析対象としたが、分析対象とするルートの妥当性も今後考慮する必要がある。ほとんどのトレッカーは、事前にインターネットやガイドブックでトレッキングルートの情報を得ている。近年はとくに前者が多く、目的地の観光局が編集・発信した情報や、それらをもとにより広い地域のトレッキングルートを集めて発信された専門サイト(例えば、<https://www.bergfex.at/>)の情報を参考にしてしている。それと並行して、ルート上の積雪状況、迂回ルートなどと至った細かい情報は目的地で得ている。こうした点を踏まえれば、観光局がインターネット上で公開したトレッキングルートを分析した、本研究の結果は妥当なものであるといえよう。ただし、実際には今回分析したルートの複数を組み合わせて利用する場合も想定される。実際のトレッキングがなされているルートに即した分析が可能となるような、議論を今後もすべきであると思われる。加えて、トレッカーによるルートの評価や選択理由について深めていくことも重要である。これらの課題を克服していくことを通じて、トレッキング・ツーリズムの本質的な特性解明がもたらされると思われる。これらの点に関しては今後の研究課題としたい。

本研究は、平成30年度筑波大学山岳科学センター機能強化に向けた調査研究の一部である。

[注]

- 1) エッツタル観光協会 Ötztal Tourismus のホームページ (<https://www.oetztal.com/>) で、2018年8月から9月にかけて、掲載されている全てのトレッキングルートを収集した。集計の際には、重複して掲載されたルートを取り除き、また所要時間等についての明白な誤りについては他の資料 (Marberger, 2013; Moczynski und Schmarda, 2016; Zahel, 2016; 2017) を参照にして修正した。
- 2) ドイツ・オーストリア山岳会プレスラウ支部は、1877年当時ドイツ帝国の版図にあった同都市 (現ポーランドのヴロツワフ) で設立された。第二次世界大戦直後、プレスラウ支部の名称のままで、ドイツのシュトゥットガルト北郊のルートヴィヒスブルクで新たに設立され、1990年には支部の所在地はシュトゥットガルトに移された。 <http://www.dav-sektion-breslau.de/> (cited: 2019/02/22)
- 3) ドイツ山岳会ベルリン支部のHPによる。 <https://www.dav-berlin.de/index.php/home> (cited: 2019/02/22)

[文献]

- 愛甲哲也・乗富剛毅 (2005) : 利尻山における登山道整備への登山者と地域関係者の認識。ランドスケープ研究, **68**, 743-746.
- 愛甲哲也・小林昭裕・庄子 康・八巻一成 (2006) : 登山道補修に関する登山者と地域関係者の評価と課題。ランドスケープ研究, **69**, 645-650.
- 伊藤太一 (2009) : 江戸時代の富士山における登山道・登山者管理と登山者による費用負担。日本森林学会誌, **91**, 125-135.
- 池永正人 (2002) : 『チロルのアルム農業と山岳観光の共生』 風間書房.
- 猪股泰広・坂本優紀・呉羽正昭・山下重紀郎 (2017a) : 登山者からみた山岳観光地域「上高地」の意味。人文地理学研究, **37**, 19-40.
- 猪股泰広・周 宇放・佐野浩彬・紀 鑫森・呉羽正昭 (2017b) : 「信越トレイル」におけるトレッキング・ツーリズムの特性－日本の農山村におけるトレッキング・ツーリズムの展開。地域研究年報, **39**, 91-112.
- 岡本卓也・藤原武弘 (2015) : 登山行動に関する社会心理学的研究：登山動機の構造とその変遷。関西学院大学社会学部紀要, **120**, 167-180.
- 菊地俊朗 (2001) : 『山の社会学』 文藝春秋.
- 呉羽正昭 (2016) : オーストリアアルプスのリゾートとウィーン。淡野明彦編『観光先進地ヨーロッパ－観光計画・観光政策の実証分析』 古今書院, 117-135.
- 呉羽正昭 (2017) : 『スキーリゾートの発展プロセス－日本とオーストリアの比較研究』 二宮書店
- 呉羽正昭 (2018) : オーストリアアルプスにおけるスキーリゾート発展プロセス－チロル州イシュグルの事例－。スキー研究, **15**, 49-60.
- 小泉武栄 (2001) : 『登山の誕生－人はなぜ山に登るようになったのか』 中央公論新社.
- 小林昭裕・ジョーンズ トマス (2017) : 北アルプスと富士山における登山者の登山目的や属性等の相違。日本観光研究学会全国大会学術論文集, **32**, 117-120.
- 信州大学山岳科学総合研究所編 (2009) : 『登山道の安全を考える－白馬大雪渓ルートの事例から』 信州大学山岳科学総合研究所.
- 田口二郎 (1995) : 『東西登山史考』 岩波書店.
- 中島敏博・一場博幸・古谷勝則・栗原雅博・加藤峰夫 (2010) : 面接調査を用いた至仏山の保全と利用に関する施策の方向性について。ランドスケープ研究, **73**, 778-785.
- 布川欣一 (2015) : 『明解日本登山史－エピソードで読む日本人の登山』 山と溪谷社.
- 梅干野成史 (2013) : 『山岳に生きる建築－日本の近代登山と山小屋の建築史』 信州大学山岳科学総合研究所.
- 松井圭介・卯田卓矢 (2015) : 近世期における富士山信仰とツーリズム。地学雑誌, **124**(6), 895-915.
- 松本至巨・尾方隆幸・内川 啓 (2006) : 登山者数からみた北アルプス、後立山連峰の山域区分。地学雑誌, **115**, 221-235.

- 宮川 浩・小澤一雄 (2008) : 登山道問題の背景. 渡辺悌二編 (2008) : 『登山道の保全と管理』 古今書院, 2-9.
- 宮島盾二・橋本啓史 (2018) : 鈴鹿山系における登山道標識の現状と統一化へ向けた課題. 日本森林学会誌, **100**, 81-89.
- 村越 真 (2010) : 2007年本州中部における登山目的による山岳遭難の実態. 体育学研究, **55**, 177-191.
- 山形俊之 (2013) : 平成登山ブームに関する一考察. 湘北紀要 (湘北短大), **34**, 189-204.
- 山崎安治 (1986) : 『日本登山史』 白水社.
- 山本清龍・柘植隆宏・庄子 康・柴崎茂光・愛甲哲也・八巻一成 (2011) : 富士登山における山岳遭難事故の登山ルート別特性. 林業経済研究, **57**, 22-30.
- 横山秀司 (1999) : オーストリアのティロール州におけるソフト・ツーリズムとRuhegebiet (静かな保養地域). 九州産業大学商経論叢, **40**(3), 153-183.
- 横山秀司 (2008) : オーストリアにおける山岳景観の保全と観光. 九州産業大学商経論叢, **48**(3), 53-68.
- 渡辺悌二 (2008) : 登山道荒廃の現状とその原因. 渡辺悌二編 : 『登山道の保全と管理』 古今書院, 26-39.
- 渡辺悌二編 (2008) : 『登山道の保全と管理』 古今書院.
- Bätzing, W. (2015) : *Die Alpen: Geschichte und Zukunft einer europäischen Kulturlandschaft, 4. Auflage*. Beck, München.
- Deutscher Alpenverein, Österreichischer Alpenverein und Alpenverein Südtirol (Hrsg.) (2016) : *Hoch hinaus!: Wege und Hütten in den Alpen, Band 2*. Böhlau, Köln.
- Gidl, A. (2007) : *Alpenverein: Die Städter entdecken die Alpen. Der Deutsche und Österreichische Alpenverein von der Gründung bis zum Ende des Ersten Weltkrieges*. Böhlau, Wien.
- Jülg, F. (2001) : *Österreich: Zentrum und Peripherie im Herzen Europas*. Klett-Perthes, Gotha.
- Lew, A. A and Han, G. (2015) : A world geography of mountain trekking. Musa, G., Higham, J. and Thompson-Carr, A. (ed.) : *Mountaineering Tourism*. Routledge, London, 19-39.
- Marberger, H. (2013) : *Öztaler Wanderbuch, 2. Auflage*. Tyrolia, Innsbruck.
- Moczynski, R. und Schmarda, T. (2016) : *Ötztal, Pitztal*. Kompass, Innsbruck.
- Nehm, C. und Köll-Scheiber, I. (Hrsg.) (2012) : *Obergurgl: Berge, Menschen, Geschichten*. Umschau, Neustadt an der Weinstr.
- Pinzer, B. und Pinzer, E. (2008) : *Ötztal: Landschaft, Kultur, Erholungsraum, 2. Auflage*. Löwenzhan, Innsbruck.
- Richins, H., Johnsen, S., & Hull, J. S. (2016) . Overview of mountain tourism: substantive nature, historical context, areas of focus. In Richins, H., & Hull, J. (Eds.) : *Mountain Tourism: Experiences, Communities, Environments and Sustainable Futures*. 1-23, CABI, Wallingford.
- Zahel, M. (2016) : *Trekking im Ötztal - Pitztal*. Rother, München.
- Zahel, M. (2017) : *Ötztal, 7. Auflage*. Rother, München.

英文タイトル

An analysis of trekking routes in Ötztal, the Austrian Alps: Towards the analysis development of trekking tourism

KUREHA Masaaki, YOSHIZAWA Nao and MATSUMURA Kentaro